

型を繋ぐ、こけし職人

佐藤 萌、濱口亜沙子

現在、伝統こけしが20代、30代の女性の間でひそかなブームとなっている。職人が手作業で絵付けをする伝統こけしは、一体一体微妙に表情が異なる。大量生産の時代の中で、彼女達を魅了するのは、そういった一点ものの温かみだ。

元々こけしは、お椀やお盆などろくろを使い木製の生活用具を作る職人「木地師」が、本業の傍ら子供の玩具として作ったのが始まりとされている。宮城県の鳴子温泉、福島県の土湯温泉など東北地方の温泉地が発祥で、そこを訪れる湯治客のお土産の定番となり全国に広まった。顔のかたち、表情、胴体の模様などの特徴で東北地方6県11系統に分けられる。

今年9月初旬、東京上野の松坂屋で「日本の職人展」が開催された。南部鉄器や仙台箆笥など各地の伝統工芸品が並ぶ中、伝統こけしのブースには38歳の若い職人さんがいた。遠刈田系伝統こけしの工人佐藤康広さんだ。彼は4年前にサラリーマンを辞め、父親の仕事を受け継いでこの世界に飛び込んだ。こけしだけではなく、だるま、けん玉などの玩具から茶道の道具に至るまで、ろくろで作れるものなら何でも作る。

こけし文化を盛り上げようとする社会の取り組みに関わることが多い佐藤さんは、震災後、日露の伝統文化交流の機会で、ロシアのマトリョーシカ職人のもとを訪れた。またファッションブランドとのコラボレーションで、伝統こけしにはない青色のこけしの制作にも携わった。

伝統こけし職人として新たな試みをしてきている佐藤さんであるが、こけし作りに関して、「周りの人が培ったベースに乗っかっているだけ」と話す。こけしの型、それぞれの特徴は伝統的に作られたものであり、その枠から大きくそれることはない。より綺麗に見せるために模様に意匠を凝らしたり、早く描くために図を崩したり抽象化したりという工夫は行うが、全てベースがある上での表現なのだ。

「自分は中継ぎの役割。何千人もの職人さんの仕事の延長線上に自分がいて、その技術をこぼさないで次につなげるだけでとても大変なこと。」

真摯に仕事に向き合う謙虚な姿と飾らない人柄がとても魅力的だ。つくるものは違っても、ものづくりにかける職人の思いは皆同じだという。日本の職人展に参加する他の職人を尊敬し、一緒に頑張っている仲間だという意識が彼の中にはある。